小田原市文化振興審議会　第１回会議概要

１日　時　令和２年９月10日（木）10：30～12：00
２場　所　小田原市役所　７階　大会議室
３出席者
（１）委員
杉本委員、大石委員、関口委員、木村委員、吉田委員、萩原委員、外郎委員、鈴木委員、池田委員、浅井委員
（２）行政
守屋市長、石川文化部長、古矢文化部副部長、和田文化政策課長、諏訪部文化政策課副課長、穂坂主査、原主事
４傍聴者　０人

５会議の概要
（１）諮問
「文化によるまちづくり条例の基本計画の策定及び基本計画に基づく施策に関する基本的事項について」
（２）会長・副会長の選出
※小田原文化振興審議会規則第４条第１項に基づき、会長及び副会長１人を置き、委員の互選により選出
〇会　長　杉本　洋文　委員
〇副会長　吉田　眞理　委員
（３）概要説明
計画策定に至る経緯について、事務局より、資料に基づき説明
（４）意見交換
〇会長
今日は、最初の委員会ですので、委員の簡単な自己紹介と、続いて小田原の文化の特徴、その文化を活かしたまちづくりの２点について、ご意見をいただきたいと思います。

〇Ａ委員
小田原といえば、他にはない歴史と自然がある。それに加えて、新しいものが育っていく環境が整うと良いと思う。
小田原は、市民の方がとても温かく、学生達を優しく褒めてくれるという印象がある。若い人を育てる力があるまちだと思う。また、小田原短期大学の近くにある閑院宮御別邸跡や清閑亭など、小田原市内にはたくさんの史跡や文化財といった文化が、街じゅうにあると感じている。もっと多くの人に知ってもらい、これらを活かしたまちづくりを行うことで、市外から人を呼び込めるのではないか。

小田原の中に入ってみれば素晴らしいと思うのだが、この素晴らしさが外にはあまり聞こえてこない。市外からもわかるようにすることで、より多くの取組が行え、観光客等が増えることで財政的にも支えていけるようになるのではないかと思う。

小田原は岡山県倉敷市などにも匹敵する、多くのものを持っているが、それらが資源として財政を支えられる状況になっていない。維持も大変だと思うが、小田原の歴史と自然、文化の素晴らしさに、更に新しいものを付け加え、財政等の根幹部分を整えれば、素晴らしいまちになるのではないかと考えている。

B委員

文化の定義はとても幅広く、奥が深い。そして決定的な答えはなく、「文化」という言葉は多様に使われているのが現状である。

これまで、文化会館の管理運営や音楽や演劇、ダンス等の芸術文化のプロデュースを行ってきた自分としては、文化とは「その土地で生まれ、長い月日を経て定着し、だんだんと他の地域に広がっていったモノやコトの総称」と定義している。これを小田原に読み替えると、「小田原で生まれ、長い月日を経て定着し、湘南地区・神奈川県域・全国、そして世界に広がっていったモノやコト」となるが、これが一体何なのか、小田原に来てまだ日が浅く、答えを見つけられていない。小田原独自の魅力を、小田原で生まれた方々に教えていただきながら見つけようと思っている。

小田原で芸術文化の活動をされている方や団体と出会って話を聞くと、小田原はいい意味で遊び上手な、芸人が多いという印象が強い。小田原は豊かな自然・文化があり、日本の中でも長い歴史を持っており、魅力的なものがたくさんある。商売や農業をやっている方々と接すると、小田原での人生・暮らしの中に、魅力が凝縮されているのだと感じる。それが、商売や文化活動、なりわいに派生していると思う。

市民ホールを中心に、様々なジャンルの方々が出会って、新しいものを生み出し、さらに新しいジャンルに出会い、新しいものを生み出す。その流れを作っていくことが、小田原における文化によるまちづくりの一端を担っていくことができるのではないかと考えている。

C委員

ビジョンとは、自分的には「未来図、将来実現しようとする計画」を指していると考えている。未来へつなぐことは大事なこと。まちづくりの基本ではないか。自分は小学生の頃から演劇に関わってきた。最初に演劇に興味を持ち、演劇について学校の先生から教えられた当時の経験が、演劇に関わり続ける今につながっている。

小田原には劇団こゆるぎ座という劇団がある。早稲田大学の文学青年を中心に、この小田原に文化の火を灯して、明るいまちにしようと思いから創設され、現在まで 75 年続いている。自分は 60 年近くこの劇団こゆるぎ座の座長を務めている。この活動を通じて、いろいろな勉強をさせていただいた。演劇は素晴らしく豊かな情操文化であり、人々がともに歩み、ともに成長していく要素を含んでいる。

「感動こそ心の文化」。これを肝に銘じ、現在も文化活動に邁進しているところである。

D委員

自分は住民組織の代表であるが、文化とは、地域の人が参加できるようなものでなければ、廃れていくと思う。住民から無視されたものは長く続かない。

いかに住民を巻き込んで文化を育てていくか、行政と地域が一体となって進めていくものであると思っている。住民の代表としては、いろいろなところとコンタクトを取りながら、進めているところである。

オール小田原で考えていかなくては、いいものが出来上がっても意味がないと考えている。

E委員

アール・ド・ヴィーヴルは、8 年前に立ち上がった NPO 法人である。地域に住む、障がいのある子どもから大人までを対象に、文化活動や創作活動、表現活動を提供し、自己表現する場を作り、彼らが持っている可能性を引き出す活動をしている。

障がいのある人達が展覧会やギャラリートークを行い、社会とつながる機会を持つことで、自分らしさを大切にすることの重要性に気付く。やがて周りにいる家族や支援者、地域の方々へ、ネットワークが広がる。障がいがあるから家を出られない、家にいるしかないとあきらめている人がいるが、そういった人々が、社会参加でき、一人でもいろいろなことができるようになることが大事だと考える。この活動が広く認知されて障がい者も文化的な活動をしていることをより広めていきたい。

平成 30 年に「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」ができたことで、行政にも障がい者の芸術活動の大切さを認識いただいたと感じている。これをきっかけに、様々な所で作品を見る機会が増えて、まちづくりにも広がっていくと考えている。

F委員

歴史と観光、そして教育・福祉は、一体となって伝えていくものだと改めて思っている。近年、来日している多くの外国人観光客は、日本の文化を見に来ている。文化とは、その国や地域の歴史であり、象徴を表し、時には住んでいる人の精神と言うべきものだと思う。伝承したり守ったりするのも、住んでいる人たちである。文化を残すということは、その地域の人々の心を一つにし、心を豊かにするもの。それには技術や才能、また資金が必要であり、現在では観光という仕組みを使って、資金を生み出す取組が各地域で行われている。

伝承のために、年配者の方が大人の後継者を探していることが多いが、大事なことは子どもにいかに伝えられるか、ゆだねられるかということで、文化に対する教育が大事だと思っている。そのために新しくできる市民ホールなどを活用して子どもたちに文化に接する機会を増やしたい。自分も、子どもの時に見た歌舞伎の印象が強く残っている。子どもの時にいかに文化に触れるか、触れさせるか。それが親や社会の責務だと思う。

自分が小田原らしい文化と考えるのは次の 6 点。

1 点目は武士・戦国の文化（城などの建造物、甲冑・鋳物など）、2 点目は江戸期宿場町城下町のなりわい文化（提灯・寄木細工・かまぼこ・ひものなど）、3 点目は民衆の文化（お祭り・神輿・山車・漁師まち・海の文化）、4 点目は交通の文化（地理的に交通の要所で、鉄道・道路が多くそろっている

点。鉄道の歴史だけみても人車鉄道、馬車鉄道、路面電車などから新幹線まで)、5 点目は近世の邸園文化（震災等で失われてしまったものも多いが、復興したものもある)、そして 6 点目は舞台文化（歌舞伎や市民演劇などの無形文化で市民ホールを活用する）である。

日本人は、モノをしっかり作り、大切にする。そして古いものは保って再活用し、工夫して新しいものを創作する。こういった文化を、小田原の SDGs 未来都市につなげて、成果が出せればと考える。

G委員

今回、資料にある「心豊かな暮らし」という言葉が目に留まった。これまでの豊かさとは、物質的な豊かさ、便利さだった。そういう時代は去って、一人一人が心豊かな暮らしを、どう実現していくかということに変わってきている。小田原らしさというと、自然や歴史等いくつか出てくるが、これらを他市と比べてみるとその言葉自体に違いはあまりない。自分としては、「小田原ならでは」というキーワードで考えていきたい。

文化について、大事だと考えていることは 2 点ある。1 点目は次の世代が小田原を好きになって、伝えていくこと。子どもの教育や、活動ができる環境を作ることが大切である。2 点目はそもそも文化とは何かということ。京都大学の前学長が、動物と人間の差は何かと研究を行った。サルとヒトを比較して考えると、サルも家族（群れ）で暮らしているが、違うのはものの食べ方だそうだ。サルも一緒に食事をするが、自分の分を取ったら背中を向けて食べる。ヒトは目の前に食事を置いて、みんなで囲んで食べる。この行動は人間だけに見られ、食事の場で様々なコミュニケーションをとり情報交換をしている。だからこそ、人間だけが文化や文明を持っているということである。現在はコロナの影響で三密を避ける状況になっているため難しい。このような環境の中で、市民ホールの運営や文化がどうなるのかも、今後の大きな課題だと思う。また、現在の気候変動や SDGs 未来都市としても、これからの文化の在り方というのが話し合うテーマとなっていくのかと思う。

H委員

小田原の魅力は東西の交流点であるということだと思う。人が東から西へと行き交う中で、歴史的にも様々な文化が生まれてきた。人を招き入れることで人と人が出会い、何かが生まれたということが非常に多いのではないか。小田原で歌っていた宮路オサムさんやガンダムの作者である富野由悠季さんのことなど、地元の先輩などから様々な話を聞いた。小田原囃子多古保存会など伝統芸能を守っている団体を間近に見て、地域の活動をやってみようと思い、市民活動をいくつか行っている。

活動の中で気づいたのは、小田原には何かを感じさせ、やってみようと思わせる様々なものがあるということ。いろいろな土地に旅をしてその土地の人と話をする際、小田原に住んでいるというと小田原情相撲の話が出る。浪曲の演目で、大関の雷電為右衛門の飯泉での相撲の立ち合いの話であるが、小田原には街じゅうにいろいろな物語が残っている。たくさんの活躍した人がいることもあり、個人的には、活動の中で様々な人やものを掘り起こし、小田原から全国に発信できればと考えている。

Ｉ委員

東京出身で昨年の 10 月、小田原に引っ越してきた。小田原は住めば住むだけ味が出る場所であり、

外部から来た人間としては、小田原はいいまちだと感じている。小田原の根底にあるもの、小田原の思想等をもっと理解をしていきたいと思っている。

小田原の文化については、城下町と宿場町の歴史に注目したい。特に宿場町の文化の中では、最近駅に復活した小田原ちょうちんや寄木細工、漆器などが特徴的、伝統的な小田原らしさなのではと考えている。小田原を訪れた人々がこうした小田原の産物に魅了され、各地に持ち帰って小田原の文化として認識されたのではないか。これらをどう活かしていくのか、まだ考えがまとまっていないが、活かしていけると、小田原の魅力となると思う。

小田原の大きな課題の一つとして、人口減少があると思う。文化をまちづくりに活かしていくと、２つ効果があるのではないか。一つは、小田原で育った人が外に出たとしても、ゆくゆくは小田原に戻ってきたいと思うこと。もう一つは小田原に移住してくる人に、プロモーションして魅力を伝えていければ、小田原に人が集まるということ。人々を引き付け、呼び込む効果があるのではと思う。

会長

小田原は千年以上もの長い歴史を持った歴史都市である。まちには長年積み重ねられた文化が脈々と眠っている。これから先、どのように活かすのかが重要になる。小田原は、都市そのものが文化の舞台であり、市内各地で様々な文化が発見できるので、まちを巡ることで小田原の文化を体験することができる。その独自の歴史と文化を、未来や子どもたちへ、どのように伝えていくかが、私たちの課題だと思う。

小田原には、数百年を経た老舗が脈々と残され、現在も活躍している。「老舗」が長く生き続けられるのは、歴史と伝統を守り伝えるだけでなく、時代対応した革新を続けてきたからだと言われている。

小田原の銀座商店街の 100 年の経過を NPO 小田原まちづくり応援団で調査した。現在も商いを続けている店舗は、約３０年ごとに新たな投資がされ、創業からの業態を継続、新たな業態に転換、あるいはテナントを入居するなど、変化しながら続いている。新規投資しない店舗は消えている。

「文化」は、歴史を伝承するだけでなく、革新を起こして時代対応することが重要になる。「交流」は、これまでのものを一度壊して、新しいものに生まれ変わらせることだと言われている。

新しい「小田原三の丸ホール」は、小田原の文化を継承しながら、新たな文化を創造する拠点となる場所になるべきで、小田原の文化は素晴らしいのだが、大切に持っているだけではだめで、それを新たな文化へと創造し、まちづくりへ活かすべきである。

歴史と伝統があるまちは、新たなものを拒否しがちだが、新たに生まれている文化を幅広く取り込んでゆく決断も必要で、小田原の若い人たちの中にあるサブカルチャーなど、広範な若者文化をどのように表現できるのか期待したい。

日本は、人口減少で、小田原も同様である。これからのまちづくりのためには、若い人たちが楽しく集い、暮らして行ける場所を増やすべきで、何か新しいワクワクする出来事が起きる可能性を広げるべきだと思う。その時に大切なのは文化になる。歴史と伝統があることは、コンテンツが豊富だということで、それを新しい文化に生まれ変わらせることも重要になる。

次回以降、未来志向で考えて行きたいと思うので、よろしくお願いします。

今日はありがとうございました。